

5. 避難訓練

1 スクールバス運行中の地震・津波対策

学校法人平成学園 認定こども園ひまわり幼稚園

(ひまわり幼稚園：園児数：194名・職員数：13名)

(夢工房：園児数：62名・職員数：11名)

1. 園の状況

当園は南国市北部の田園地帯に位置し、海岸線から直線距離で約7キロメートル、海拔5メートルという立地にある。最新版の津波浸水予測では、想定される最大の地震が起こった場合でも、津波浸水区域外となっている。園の北側にある国分川が氾濫した場合は、床下程度の浸水は予想されるが、南国市危機管理課に問い合わせたところ、まず氾濫することはないということであった。以上の情報から、子どもたちが園内にいる時に津波が発生した場合、園舎の2階に避難することになっている。また、園児が数日過ごすことも想定をして、食料や水等の備蓄も準備している。

2. 園での取組

1) 課題

当園では、スクールバスを運行しており、スクールバスのルート上には津波発生時に浸水が予測される地域が含まれている。津波が発生した場合、園とバスとの通信が困難になることも予想されることから、地震・津波発生状況に応じ運転手と添乗員が適切に判断し対応できるためのマニュアルが必要であると考え、①バス運行時の避難マニュアル作成②バス運行時の避難マップ作成（公共の避難場所が確保できない箇所において、民間のマンション等への避難依頼）③バス運行中の避難訓練に取り組んだ。

2) バス運行時の避難マニュアル作成

スクールバス運行時に地震・津波が発生した場合は運行を中止し、全てのスクールバスに設置している防災緊急ラジオで情報を得ながら、周りの状況を確認し子どもたちの安全を確保した上で、園との連絡を行い、園の指示を受けて行動するという流れになっている。しかし、園と連絡が取れない場合も十分想定されることから、その際の避難マニュアルを作成した。

津波警報等がない場合、道路や建物に特に被害がなければ、運行を続行するが、被害がある場合は原則としてその場を動かず、バスの中で待機することとしている。また、津波が発生した場合は、すぐに高い場所への移動をし、その際は、最も近くにある高い場所や建物に園児を連れて避難することとしている。

3) バス運行時の避難マップ作成

バス運行時に津波が発生した場合は、すぐに近くの高い場所に避難できるよう、バスルート近くの高い場所や建物を調べ、それを地図上に示したバス運行時の避難マップを作成した。避難ビルを設定するに当たり、まずは行政が指定している津波避難場所を中心に設定したところ、ほとんどのルート沿いがカバーできた。さらに安全性を高めるために、園児家族が居住している高層マンションに、避難場所確保の依頼をすることにした。

まずは、そのマンションに住んでいる在園児家族を通じて、マンションの管理組合に話をしていただいた。約1ヶ月後にマンションの理事会で承認をいただいたが、その際「その在園児家族が在宅の場合に限る」という条件が出された。それは、玄関のオートロックを誰が解除するかという問題を解消するためである。マンション側で、当園の園児であることの確認ができる人が他にはいないので、この条件で同意をいただき避難時のビルとして指定を行った。その後、他のいくつかのマンションとも交渉をしたところ、基本的には同じ条件で、最終的には高知市内で4か所の承諾をいただくことができた。

4) バス運行中の避難訓練

前述のとおり、民間のマンションにもご協力をいただき、スクールバス運行時の津波に対する避難場所の確保はできたが、実際に避難するための訓練をする必要があると考え、避難の承諾をいただいたマンションのひとつに協力を依頼し、避難訓練をさせていただいた。

まず、バス運行中に緊急地震ラジオが鳴ったという想定で、バスを路肩に停車し、園児の安全を確保する。次に、添乗員がラジオから津波が発生するという情報を得て（訓練では、携帯電話を鳴らす）近くのマンションまでバスで移動する。到着後、運転手が先頭で、添乗員が最後尾につき、階段を使ってマンションの最上階（8階）まで、3～5歳児約20名の園児を誘導した。地震発生から、約10分弱で避難は完了し、津波到達予定時間よりかなり早い時間で避難することができた。建物によっては、構造も違い避難する際に違いがあることから、マニュアル作成だけではなく、このように実際に訓練をすることで、子どもはもちろん、職員が冷静に対応できる体制づくりを進めていきたいと考えている。

3. 今後に向けて

今回、スクールバス運行時の避難について取り組んだが、移動中の地震発生については対策が必要な地域が膨大に広がるため、園内での防災対策に比べ、非常に大変だということがわかった。また、園と連絡が取れない可能性が高いため、運転手と添乗員の2名で状況を判断し行動しなくてはならず、事前の取り決めやシミュレーションが非常に重要になるとともに、子どもに対して落ち着かせる言葉がけを行うなど、その果たす役割は重要である。また、子どもたちも日頃から先生の話の姿勢づくり、そして階段を使って高い階まで避難するための体力をつけておくことも大切になる。

防災対策は「ここまで準備すれば絶対に安心」ということはない。今後は、もっと細かい取り決めを行い、全職員の防災意識を高め、子どもたちの命を守るという信念のもと、訓練を重ねていきたい。

2 地域との連携を通してのマニュアルの見直し

室戸市立 三高保育所

(園児数：12名・職員数：3名)

1. 園の状況

当所は、室戸岬の東側沿岸に位置しており、園児数12名の保育所である。園舎は2階建て(保育室が2階)で耐震工事は済み、窓ガラス飛散防止対策を今年度実施した。海岸に近く地震が発生した場合、津波浸水深3～5メートル、津波到達時間10～20分となっており、津波の直接的な影響を受けることが想定される。

2. 園での取組

1) 課題

これまでも防災マニュアルを作成していたが、地震が発生した場合、より安全に子どもたちを避難させるためにはどうしたらよいかという視点で、高知県教育委員会が平成24年4月に示した「保育所・幼稚園等防災マニュアル作成の手引き 地震・津波編」を参照した。特に、津波の被害を受ける当所にとって、とにかく早く子どもたちを安全に避難させることが求められる。しかし、園児の課題としては、年齢や運動能力の個人差が大きく避難に時間がかかること、午睡中の場合はすぐには起床することができない子どもが多いことなどから、10分以内の避難が4名の職員だけでは対応できないという現実が見えてきた。

2) 地域と連携した防災訓練の実施

見直しにあたっては、6つの視点(地域・建物・園児・家庭・職員・行政)で、現状と実態を把握するとともに、課題の洗い出しを行った。そして、その中で、園・職員はどのように対応すればよいか、園児への指導はどのようにすればよいか、保護者・地域へはどのように対応すればよいか、施設・設備の改善をどのようにすればよいかという4つの柱で改善策を考えた。(表1)

項目ごとに整理していくことにより、日頃見逃しがちなことも把握することができた。また、日々の保育の中で、体力向上を図ったり、いろいろな場面を想定した避難訓練の実施などに加え、近隣の小学校や地域と連携した避難体制の確立について、これまで以上に取り組んでいる。

毎年、室戸岬地区の岬地区自主防災組織協議会が中心となり行う防災訓練は、今年7月6日(土)に実施され、保育所開所日であったことから、保育所も参加した。当日は室戸消防署や日赤の協力のもと、起



(高台へ避難訓練の様子)

震車体験、火災が発生した場合の消火訓練、非常食の炊き出し訓練を行い、保護者にも参

加を呼び掛け、子どもたちの避難を実際に見ていただくとともに、引き渡し訓練も行った。

訓練は、午前 11 時に地震・津波が発生という想定で、地域に避難を知らせる警報サイレンが鳴り、乳児は避難車、幼児は走って国道を挟んで隣にある小学校への避難を行った。そこからは、すでに避難をしてきている地域の方に協力していただき、高台の避難場所に向かった。高台に避難する際は、急な坂道で避難車を押すことは大変だが、地域の協力をもらうことで迅速に避難することができた。

参加した保護者からは、

- 実際の避難を見ることができて、安心した
- 非常食の炊き出しを試食して、家庭でも準備しなければならないと思った
- 引き渡しがどのように行われるか具体的に分かった
- いざというとき、地域の協力があれば子どもたちを安全に避難できる
- 安心と心強さを感じた



(高台へ避難した時の様子)

などという意見が出された。

起震車で実際の地震の揺れを体験した幼児からは、

- とても怖かった
- 立っていられなかった

などの感想があり、体験することの大切さを実感した。

3. 今後に向けて

今回、6つの視点から職員で話し合い防災体制を見直したことにより、当所の現実的な課題を見つけることができた。地震・津波はいつ発生するかわからない。今後は、あらゆる場面を想定しての訓練を充実させていくことが必要であると考えている。例えば、地震・津波が、園庭やホールでの活動中または午睡時に発生した場合などの場面を想定した避難訓練などである。時間帯によって職員数やその対応も異なることから、一つひとつの現状をしっかりと把握し、実態に応じた対策を講じていきたい。

表 1

「防災マニュアルの見直し表」

	現状・実態	課 題	改善策			
			園・職員の対応	園児への指導	保護者・地域	施設・設備改善
地域	<ul style="list-style-type: none"> ◆小学校が国道を挟んで向かい側に立地 ◆避難道が急な傾斜 ◆地域の防災組織が活発に活動 	<ul style="list-style-type: none"> ◆電信柱やブロック塀の倒壊の危険性がある ◆防災組織との連携 ◆地域の防災組織との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ◆安全確認のための避難ルートの確認 ◆危険箇所の確認 ◆防災マップの改善 	<ul style="list-style-type: none"> ◆日常の保育活動での意識づけ ◆散歩などで避難経路を歩く 	<ul style="list-style-type: none"> ◆危険箇所の点検実施 ◆地域の防災訓練への参加案内 	
建物	<ul style="list-style-type: none"> ◆耐震工事が済み ◆保育室が2階 ◆正門から玄関まで急な坂道 ◆窓ガラスに飛散防止フィルム（H25整備） ◆海拔8.3mで海岸に近い 	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難する際に、玄関ポールの倒壊の恐れ ◆玄関の坂道の急傾斜 	<ul style="list-style-type: none"> ◆防災組織との打ち合わせ ◆合同訓練の実施 ◆引き渡し訓練の実施 ◆施設安全点検の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ◆机等常時設置 ◆防災頭巾の着用を迅速に行う ◆上履きの着用 	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難方法・避難場所についての説明 ◆地域の防災組織の協力 	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難時の通路の確保 ◆飛散防止フィルムの貼付 ◆ピアノの固定 ◆2階からスロープで避難の方法案実現
園児	<ul style="list-style-type: none"> ◆園児12名 ◆運動能力の個人差 ◆体力の低下傾向 ◆防災頭巾 	<ul style="list-style-type: none"> ◆気になる子がおりに、避難に時間がかかる ◆午睡の場なかなか起きられない子どもが多い 	<ul style="list-style-type: none"> ◆災害時の対応や個々の役割を共通認識 ◆職員の連携強化 	<ul style="list-style-type: none"> ◆生活・活動の見直し ◆避難体制を指導 ◆色々な場面での避難訓練を実施 ◆体力・運動能力向上 	<ul style="list-style-type: none"> ◆地域・小学校と連携した避難 	
家庭	<ul style="list-style-type: none"> ◆漁業従事者が多い ◆仕事場が離れている（室戸市内） ◆家庭数9世帯（在園児に兄妹） 	<ul style="list-style-type: none"> ◆日中、漁に出たら迎えに来れない ◆トンネル崩壊で迎えに来られない ◆祖父と違ってくることも想定 	<ul style="list-style-type: none"> ◆引き渡しカードの改善による安全・確実な引き渡し方の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難時の各家庭で確認 	<ul style="list-style-type: none"> ◆緊急時の引き渡し方法の共通理解 ◆避難訓練に保護者が参加 	
職員	<ul style="list-style-type: none"> ◆正職員4名、パート1名 ◆パート人員は、様々であり、年休・週休・研修他により、変わる ◆経験年数の長い職員が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ◆保育時間中の園児の人数確認 ◆正職員以外のは、臨機応変には対応しにくい ◆職員の高齢化で避難時の体力が低下 	<ul style="list-style-type: none"> ◆マニュアルの見直し ◆色々な場面での避難訓練の立案・評価・反省 	<ul style="list-style-type: none"> ◆担任以外の話もよく聴く ◆日頃の信頼関係の構築 	<ul style="list-style-type: none"> ◆地域に園便りを発信 ◆園便りなどで職員の名前を周知 	

3 親子による緊急時引き渡し訓練

社会福祉法人大埴福祉協会 大篠保育園

(園児数：166名・職員数：25名)

1. 園の状況

当園は、南国市中央部の住宅地域に位置し、園児数166名と大規模園である。南海トラフ巨大地震において、県発表の津波浸水予想地図によると津波浸水区域外であるものの、予想震度7の揺れに対する対策強化、より安全な避難場所の考慮、職員や子どもたちの危機管理意識の向上や保護者や地域の方を含めた避難訓練などに取り組んでいる。

2. 園の取組

1) 課題

地震が発生した場合、園児を安全に避難させ、保護者に引き渡していくためには、保護者にも高い防災意識を持ってもらうことが大切である。避難場所や避難方法、保護者への連絡・引き渡し方法など、保育園と保護者が共通理解をしておくことが重要であると考えている。普段は、保育園の2階を避難場所としているが、地震の震度や被害状況によっては、園舎2階が使用できないことも想定しておかなければならない。

2) 引き渡し訓練

当園では、近隣の大篠小学校の3階と吾岡山を2次避難場所と決め、今回は、吾岡山への親子避難訓練と引き渡し訓練を警察署・消防署の協力のもと実施した。訓練のねらいは、以下の2点とした。

○園で行っている避難訓練の様子（緊急の避難場所、避難経路）を保護者に知ってもらうことにより、保育園が取り組んでいる防災対策への理解とともに、保護者の防災意識の向上を図る。

○確実に保護者に子どもを引き渡すための引き渡しカードの導入を行い、共に吾岡山までの避難訓練を体験的に学ぶことにより、混乱なく子どもを受け取ることができるように共通理解を持つ。

避難は、地震発生後、揺れが収まってから園児と職員は園庭に集合、南国バイパスを横断し、吾岡山を目指した。南国バイパスは交通量が多いため、警察署員に横断の援助・誘導を依頼し、消防署員や消防団の方には坂道を職員とともに避難車を押して上がるのに協力していただくなど連携して目的地まで避難した。保護者には、その様子を見ていただいた。



(他機関と連携した避難の様子)

避難場所では、避難リュックの中に入れてあるカンパンと水を試食しながら災害時に必要なものを話し合い、園の避難リュックの中身を見てもらった。そして、引き渡しカード

を使用しての引き渡し訓練を実施した。

実施後の反省では、きょうだい児がいる場合は、保護者が各クラスに引き取りに行く必要があることから混乱をしてしまったという声があった。子どもたちの集合場所、きょうだいがいる場合の引き渡し方法をどうするか、などの新たな課題も見えてきた。

参加した保護者からは、

- 園での避難の様子が分かり安心した
- 引き渡しを実際にどのようにすればよいか分かった
- 家庭でも、防災用品等を準備しなければならないと思った

など多くの感想が寄せられた。

実際に訓練を行うことにより、当初のねらいである保護者の意識の向上や保育園との共通理解を図ることができた。



(引き渡し訓練の様子)

3. 今後に向けて

訓練時には保護者への引き渡しがスムーズにできたとしても、地震・津波が発生した緊迫した状況の中では、心理状況なども違い混乱が生じることも予想される。今回の訓練により明らかになった課題については、混乱を防ぎ、迅速な引き渡しができるよう引き渡しカード及びマニュアルの見直しに取り組むとともに、訓練を重ねることにより見えてくる新たな課題に対して混乱を防ぎ迅速な引き渡しができるよう適切に対応していきたい。

緊急避難時引き渡しカード				大徳保育園 平成25年度																															
クラス名																																			
園児氏名			生年月日	平成	年 月 日 歳																														
住 所			兄弟児の 在園有無	園児氏名	クラス名																														
保護者名				園児氏名	クラス名																														
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 25%;">引 き 取 り 者 名</th> <th style="width: 10%;">続柄</th> <th style="width: 25%;">住 所</th> <th style="width: 20%;">電 話 番 号</th> <th style="width: 20%;">備 考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td>2</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td>3</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td>4</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td>5</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table>						引 き 取 り 者 名	続柄	住 所	電 話 番 号	備 考	1					2					3					4					5				
引 き 取 り 者 名	続柄	住 所	電 話 番 号	備 考																															
1																																			
2																																			
3																																			
4																																			
5																																			
<p>上記の項目に記入してください</p> <p>下記項目については緊急避難時引取りの際に記入して引取りをお願いします</p>																																			
保護者記入	何番の人が来られましたか	番																																	
保護者記入	引 き 取 り 者 名																																		
上記以外の方が園児に来た時など保護者記入	確 認 事 項																																		
保育士記入	引 き 渡 し 職 員 名																																		
保育士記入	引 き 渡 し 年 月 日 時 分	年 月 日 時 分																																	
保育士記入	備 考																																		
保育士記入	引 き 渡 し 終 了 (○印)	済																																	

4 小学校と連携した避難訓練

土佐市立 宇佐保育園

(園児数：92名・職員数：17名)

1. 園の状況

当園は土佐市の沿岸部である宇佐地区に位置しており、園児数92名、職員数24名の園である。平成22年度に耐震補強工事は完了し、24年度には窓ガラス飛散防止フィルム及び避難車の整備は完了している。当園は沿岸から約250メートルに位置し、海拔は3.4メートルとなっている。これまでに、南海地震による被害を念頭に置き、以前から津波避難訓練を実施してきた。平成24年12月10日に示された「高知県版第2弾 南海トラフの巨大地震による震度分布・津波浸水予測」では、津波浸水深5～10メートル、津波到達時間20～30分と予測されている。避難場所は裏山の「荒神山」で近距離ではあるが、園児ができる限り早く逃げるための対策が必要であり、近隣住民や隣接する宇佐小学校と連携した取組が必要となっている。

2. 園での取組

1) 課題

荒神山は、当園の避難場所となっていると同時に、宇佐小学校の避難場所にもなっている。これまで毎月の避難訓練は、0歳児は保育士が背負い、1・2歳児は避難車に乗せ、3歳児以上は自分で歩くことにより実施してきたが、避難道は、坂道となっており、実際に地震が発生した際には乳幼児を乗せた避難車を押したり、園児を背負ったりするなど、保育士は3歳未満児への対応でいっぱいと考えられ、共助の方法として小学校と連携した避難体制の充実を図ることが課題である。

2) 小学校と連携した避難訓練

小学校と連携した避難訓練にあたっては、小学校児童に4・5歳児の手を引いて避難してもらおうことにしているが、幼児にとって小学生と手をつないで避難するということは初めての体験であり、また、小学生にとっても幼児と手をつないで避難することも初めての体験である。これらのことから、まずは相手を意識しながら手をつないで避難するという体験が必要ではないかということから、避難経路の途中である宇佐小学校グラウンドにおいて、6年生が年長児の手を引いての訓練を行った。この訓練は、歩幅等を確認するため、グラウンド内を手をつないで周回する形で行ったが、両者が手をつなぐことに慣れていないため、スムーズに手を引くことができず、逃げる体制になるには時間を要するということが分かった。訓練では整列して手をつなぐなどの工夫をしたが、実際に地震が発生した場合、より速く安全に避難することが求められ、訓練を繰り返すことにより今回の課題を解決し、より速い避難につなげていく必要がある。今回は、手をつないでの訓練であったが、場合によっては手をつなぐがそれぞれが避難することも考えられることから、多様な場面を想定した訓練が必要であると考えている。

また、訓練に際しては、訓練記録票を作成し評価を行い、次の訓練がより有効に実施で

きるようにしている。(表1)

3. 今後に向けて

宇佐保育園職員の人員から考えると、職員のみで園児を安全に避難させることは、困難である。小学校や地域の皆さんと連携した取組を進めることにより「保育園児の避難を助けなければならない」という意識を、事前に持っていただくとともに避難に際しての協力を得る必要がある。

今後は、小学校・地域住民との合同訓練の機会を増やし、小学校との合同訓練はもちろんのこと、自主防災組織をはじめとする地域住民の皆さんとの連携を深め、どのような場面においても協力体制をとり、スムーズな避難ができるための体制づくりに取り組んでいきたい。

表1

小学校との合同訓練記録

実施日時	H24年11月29日 9時25分	天候	曇り	園長印		担当者		
想定	地震・津波を想定して、小学生との合同訓練を行う。							
実施状況	<ul style="list-style-type: none"> 地震の合図で、安全な場所に避難し揺れがおさまってから靴を履いて避難する。 年長児が速やかに小学校校庭に避難し、小学校6年生と手をつないで校庭を一周走る。その後、手をつないでいなかった6年生ともう一度手をつなぎにきてもらってつなぎかたを練習する。 						避難所要時間	10分
反省及び効果	<ul style="list-style-type: none"> 地震避難の訓練は通常の実施で慣れているため、すみやかに避難し、小学校校庭に行くことができた。 6年生と手をつなぐのが初めての経験だったので、年長児がつなぎに行こうとしてばらばらになり速やかに手をつなげなかった。列のまま待って、小学生につなぎに来てもらうようにした。 歩幅の心配をしていたが、無理なく校庭を走ることができてよかった。今度は、荒神山へも一緒に避難したい。 							



(避難訓練の様子)

5 保・小・中・高校との合同避難訓練

黒潮町立 大方中央保育所

(園児数：126名・職員数：23名)

1. 園の状況

当所は、平成21年に4つの園が統合され今年で5年目を迎えた。海拔25.7メートルの小高い団地内にあり、近くには小学校、中学校、高校がある。地震が発生した場合、津波浸水区域外と予測されているが、昨年より、より高い錦野児童公園に避難をすることにしている。避難にあたっては、住宅密集地域なのでブロック塀、住宅の崩壊、人や車の混雑が想定される。また、保育所管内は18地域に分散しており、保護者の勤務先も広範囲にわたることから、地震の際に迎えに来ることが出来ない可能性もあり、その対応策が必要である。

2. 園での取組

1) 課題

黒潮町は、最大震度7の地震が発生した場合、日本最大の津波想定高34.4メートルの津波が町を襲うと想定されているため、現在、町をあげて避難対策に取り組んでいる。保育所では0～5歳児の自分の判断で避難することが難しい子どもたちを安全かつ迅速に避難させていくためには、避難路の確認に加え、保育所を取り巻く状況や地域の状況をまず知る事が大切であるということから、地域の方と一緒に避難路や地域を歩いて団地内の危険箇所のチェックや確認を行った。

錦野児童公園は保育所だけではなく、地域の避難場所にもなっていることから、実際に地震が発生した場合には混雑が予想される。そのため、より実態に近い避難ができるのではないかと考え、昨年度に保・小・中・高校と連携し総勢700名余りが参加して、地震・津波の合同避難訓練を実施した。

2) 合同避難訓練の実施

実施にあたっては、各学校の代表者が集まり①目的②参加対象③避難訓練実施日時④避難場所⑤避難方法・ルート⑥現地での集合隊形について話し合いを行った。(図1、表1)

保育所では、より高い避難場所に移動するために、何が必要かを職員で話し合い、背負い紐(おんぶ紐)を30個用意し、0・1歳児はおんぶとバギーに乗せて避難する事、2歳児以上は自分で歩いて避難する事、各職員の役割分担等を確認した上で実施した。当日の避難訓練では、最初の園児が公園に着いたのは避難開始8分後、全園児を確認したのは10分後であった。

訓練実施後に反省及び検討を行った結果、少しでも早く避難できるように避難車としてバギーを3台購入し、地震の時も安全にすばやく避難できるように3歳児以上は上履きを履くようにした。

昨年度の反省に基づき、今年度は5月24日に昨年と同じ設定で保・小・中・高校の合同避難訓練を実施した。

0・1歳児は30人と今までになく多人数だったが、バギーに乗せて坂道を登っていると「助けます」と小学生が助けてくれる姿や、高校生が小さい子を抱いてくれるなど1回目には見られなかったお互いが助け合う姿があった。公園に一番早くに園児が到着したのは昨年かかった半分の時間の4分後であった。これは、上履きを履くようになったことと毎月の避難訓練の繰り返しによる成果であると思っている。

3. 今後に向けて

700名近くの乳幼児・児童・生徒による2回の合同避難訓練を終えて、地震が起こった際の状況を想定したうえでの綿密な計画と回数を重ねる事の大切さを痛感している。特に保育所の園児にとっては、訓練を繰り返し積み重ねていくことが必要であると考えている。また、小学校・中学校・高校とともに実施することにより、子どもたちの心に互いが助け合うという思いが生まれたことに触れ、うれしく思った。まだ園には、備蓄品、保護者への引き渡し、保護者が迎えに来られない際の対応等が課題として残されており、今後はこれらの課題に取り組んでいきたい。

図1 避難経路図



表 1

保小中高合同（地震・津波）避難訓練 実施要項																																	
高知県立大方高等学校																																	
1	<p>目的</p> <p>南海地震発生時の最大級津波から園児・児童・生徒一人ひとりが、指示や校舎・避難路の状況等を冷静な判断の中で（園児は除く）安全に気をつけながら、個人または集団全体として避難場所（錦野児童公園）まで、すみやかに避難行動ができることを目的とする。</p>																																
2	<p>参加対象及び人数</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 40%;">大方中央保育所・・・</td> <td style="width: 20%;">園児約</td> <td style="width: 20%;">134名</td> <td style="width: 20%;">(職員 28名)</td> </tr> <tr> <td>入野小学校・・・・・・</td> <td>児童</td> <td>151名</td> <td>(教職員 19名)</td> </tr> <tr> <td>大方中学校・・・・・・</td> <td>生徒</td> <td>191名</td> <td>(教職員 23名)</td> </tr> <tr> <td>大方高校・・・・・・</td> <td>生徒</td> <td>130名</td> <td>(教職員 30名)</td> </tr> <tr> <td>計・・・・・・</td> <td>園児・児童・生徒</td> <td>606名</td> <td>(教職員100名)</td> </tr> <tr> <td>参加総数</td> <td></td> <td></td> <td>706名</td> </tr> </table>	大方中央保育所・・・	園児約	134名	(職員 28名)	入野小学校・・・・・・	児童	151名	(教職員 19名)	大方中学校・・・・・・	生徒	191名	(教職員 23名)	大方高校・・・・・・	生徒	130名	(教職員 30名)	計・・・・・・	園児・児童・生徒	606名	(教職員100名)	参加総数			706名								
大方中央保育所・・・	園児約	134名	(職員 28名)																														
入野小学校・・・・・・	児童	151名	(教職員 19名)																														
大方中学校・・・・・・	生徒	191名	(教職員 23名)																														
大方高校・・・・・・	生徒	130名	(教職員 30名)																														
計・・・・・・	園児・児童・生徒	606名	(教職員100名)																														
参加総数			706名																														
3	<p>避難訓練実施日時（10：00～11：00）</p> <p>平成25年5月24日（金） 10：00・・・巨大地震発生（校〈園〉内放送） 10：02・・・避難開始（校〈園〉内放送） 避難完了（園児・生徒確認）後・・・・・・消防署講評・・・・現地解散 ※雨天時（予備日）6月3日（月）</p>																																
4	<p>避難場所</p> <p>錦野児童公園（図1参照）</p>																																
5	<p>避難方法・ルート（図1参照）等</p> <p>各、園・小・中・高が定めている緊急時避難方法・ルートにしたがって指定の避難場所（別紙地図参照）へ各自（各グループ）が「慌てず速やかに」避難する。 ※保育所、小学校・・・・西ルートを使用し避難場所へ ※中学校・・・・・・東ルートを上がり途中から中央ルートで避難場所へ ※高校・・・・・・西、中央、東の3ルートを個人選択で避難場所へ</p>																																
6	<p>現地での集合隊形</p> <p>各ホーム（クラス）出席番号順等に東向きに並ぶこと。なお、現地では700人以上の多数になるので、到着後はすみやかに整列等すること。</p> <table style="width: 100%; text-align: center; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>←</td> <td>海（南）側</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>山（北）側</td> <td>⇒</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>○</td> </tr> <tr> <td></td> <td>保育園 ○</td> <td>小学校 ○</td> <td>高校 ○</td> <td></td> <td>中学校 ○</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>○↓</td> <td>○↓</td> <td>○↓</td> <td></td> <td>○↓</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	←	海（南）側					山（北）側	⇒		○		○		○		○		保育園 ○	小学校 ○	高校 ○		中学校 ○				○↓	○↓	○↓		○↓		
←	海（南）側					山（北）側	⇒																										
	○		○		○		○																										
	保育園 ○	小学校 ○	高校 ○		中学校 ○																												
	○↓	○↓	○↓		○↓																												
7	<p>避難時の配慮事項</p> <p>① 避難途中（終了後含む）の交通安全等には十分配慮すること。 ② 避難途中、状況により <u>園児等の避難を手助けすること。</u></p>																																
8	<p>関係連絡機関</p> <p>① 黒潮潮消防署（講評・・・・避難の様子、日頃の心構え・準備等） ② 黒潮町駐在所（道路使用許可申請書等） ③ 黒潮町役場（防災関係部署・保育園担当の福祉関係部署） ④ 黒潮町教育委員会 ⑤ 錦野地区長</p>																																

6 いろいろな保育場面を想定した避難訓練

高知市立 かがみ幼稚園

(園児数：29名・職員数：5名)

1. 園の状況

当園は、高知県庁から北西に位置した津波浸水区域外の山間部にあり、園児数は29名、教職員数5名の小規模園である。昭和63年3月に新園舎が建設されている。敷地は、岩盤で崩れる恐れがないため、園が安全な避難場所と考えられている。

2. 園での取組

1) 課題

鏡地域は東西南北に広がり、鏡地区外から通園している園児もいる。また、保護者の勤務先は広範囲にわたることや近くであっても山間部であるため、がけ崩れなどの土砂災害が起きる可能性が高く、地震の際に園児を迎えにくることができない可能性がありその対策が必要である。東日本大震災以降、園ではこれまでの想定に基づいた避難の仕方や地域・家庭状況などを考慮しながら、当園の実態に応じたマニュアルの見直しを行ってきた。備蓄品についても、保護者の協力を得ながら水と食料品を個人持ちとして保管し、卒園時に持ち帰る方法をとることにより、保護者自身の防災意識を高めてもらうとともに、幼稚園での取組について理解していただく機会になるのではないかと考えている。

2) 避難訓練の実施

避難訓練の実施にあたっては、地震発生の時間帯によっては子どもたちがどこにいるかわからないことから、子どもたちがいるであろう場面として、戸外の遊具などで遊んでいる時、プール時、給食時、園外保育時、午睡時、集会時、預かり保育時などの場面を想定し、計画的に訓練が実施できるように教育課程に位置付けた。また、子どもたちが将来、「自分の命は自分で守る」という意識をもてるようにしていくことが大切と考え、それぞれの想定時において「ここで何が危険と感じるか」、「どこが安全と思えるか」など、子どもたちと共に安全な場所や避難方法も確認しながら、訓練をするようにしている。しかし、訓練を重ねていくうちに、年齢の高いクラスは慣れから危機感が薄れていった時期もあったため、抜き打ちでの訓練の実施などにより緊張感をもてるような工夫も行ってきた。

避難訓練実施前には、職員間で自分の役割の確認や子どもたちの姿を想定した配慮などを確認し合うなどの共通理解を図った。また、実施後はその日のうちに反省・課題を記録するようにし、変更が生じた場合は、再訓練を行い確認することとした。

また、一方では、保護者の意識を高めるために、講師を招いて「東日本大震災の現状」の話



(新しい経路からの避難)

を聞く機会や引き渡しカードを使った保護者への引き渡し訓練も昨年度2回実施した。実施後の保護者からは、「事前に講話を聞いていたので、怖さもわかったうえで訓練ができて良かった」という感想が聞かれ、震災のイメージをもって参加できた保護者が多くいた。

避難経路については保育室から園庭への避難経路が1箇所であったので、万が一に備え、プールフェンスに戸をつけ横切る新たな経路を整備した。(表1)

3. 今後に向けて

避難訓練を重ねてきたことにより、子どもたちには避難の仕方が身についてきている。今後もあらゆる保育場面を想定しP D C Aサイクルで繰り返し訓練を実施していくことにより、自分の命は自分で守るという子どもの意識を育てていきたい。また、あらゆる場面を想定しながら、訓練を実施することにより子どもたちの命を守っていきたいと考えている。



(保護者への引き渡し訓練)

表 1

防災マニュアル見直しにおける実践例(抜粋)

想定場所 ／ 時間	反省・課題など	改善後に実施した再訓練及び整備改善
7 / 6 地震 プール遊び 10 : 30	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの子どもはプールサイドに上がって避難できたが、4歳児1名はプール中央で頭を抱え、5歳児でも園庭への避難時にシャワー場に向かった子がいた。 事前に避難の仕方を知らせていたが、避難時の保育者の声がけを聞けなかった子どももいたので、もう一度訓練の必要がある。 揺れが起きた時にはプールサイドには上がれないだろう。プールの端まで来て揺れがおさまるまで端を押さえて待つようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 9 / 5 プールの端につかまるように事前に話していたが、遊びに夢中で合図に気づかない子やわざわざ遠くの縁に向かう子どもの姿が見られた。そこで、子どもたちと避難の仕方を確認し再度この場で訓練を実施した。今度は子どもたちもよく意識し、行動できた。 プールの水が波立つ状況になった場合は、足がとられるだろう。プールサイドに近い子どもは上に上がり、プール中央にいる子にはプールサイドの職員がビート板を投げるなどの方法も必要だろう。
7 / 20 地震 保護者への引き渡し 11 : 00	<ul style="list-style-type: none"> 日よけ用に倉庫に入れていたテントが雨天に役立った。雨だったが実際には起きうることなので、保護者からも雨天時の迎えの想定ができてよかったという声も聞かれた。 引き渡しカードはクラス別で出席順に用意していたが、名前を見つけにくかったという反省が出た。全クラス通しで「あいうえお順」にし、兄弟姉妹については上の子に合わせて綴じるようにする。また、クラスがわかるようにカード右上に蛍光ペンで色をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 3 / 14 引き渡し後、子どもと留め置きになった場合を想定して訓練をした。迎えが父親、祖父母の家庭には、訓練の意図が伝わっていないケースも見られたが、家族で共通理解することの大切さがわかり、祖父母などへの意識づけにもなった。アンケートでは「何でも手伝いできる」「自分で食べる物、オムツなどを用意しておくのがいい」などと、協力的な内容も見られるようになった。引渡しカードの作業も手際よくできた。 時間を記入するための置き時計も非常持ち出し袋に追加し、備蓄品も分散させて置くようにした。 テントは外の倉庫に2個増やし、園での留め置きを考慮し、バーベキュー台、炭なども一箇所にまとめた。
12 / 5 地震 遊んでいる時 10 : 00	<ul style="list-style-type: none"> たまたま年長組に行って遊んでいた年中児は、これまでと違う訓練状況であり、近くの机にもぐることはできたが、外への避難時に靴がないことに戸惑ったので、備えつけのサンダルを履くように保育者が声をかけた。 年中児が年長組の防災頭巾をかぶったので、以前使用していた手作り頭巾を急きょ利用した。 	<ul style="list-style-type: none"> 当日訓練後に、子どもたちと訓練で見られた行動や、子どもたちが困ったことなどを出し合い、今後に生かせるよう、避難の仕方を確認した。 各クラスに予備用の専用防災頭巾を購入し、備えた。 また、床暖房のため上履きを履いていないので予備の靴をかごに入れ持ち運びができるようにした。プールの活動時やホールでの集会時にも必要である。